お約束はお隣に

国見炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お約束はお隣に

【Ｎコード】
Ｎ４３９７Ｒ

【作者名】
国見炯

【あらすじ】
親の再婚で姉弟になった同じ年の腐女子系寧ろはまり込んだらまっしぐらな秋空（姉）と秀才系ツンツンツンデレという非常に分かりづらい音哉（弟）。歩み寄る気のまったくない秋空は、同じく歩み寄る気のない音哉と仲良くなる事が出来るのかどうなのか。秋空主人公の、メインは学園生活の恋愛要素はあるけど表に出てこないお話しになるかと思います。完結済です。

始まりはこうだった

意外と、お約束っていうのは道端に落ちている木の葉程度に転がっているのかもしれない。そう認識を改めざるを得ない事件らしきものが、突如秋空の身に降りかかった。

突然といったけど、ソレは突然じゃない。

予兆であり、片鱗はあったはずだ。

だが、放任主義だったが為に起こった悲劇。言われた本人にとってみたらネタになるかもー、なんていう喜劇程度の認識だったが、それを聞いた周りの反応が余りに面白く、怒るのも忘れて観察をするように凝視してしまう。

「あ…きちゃん…」

吃驚しすぎてどもったダンディなおじ様の声が秋空の上から降ってくる。

噛み噛みですよね。なんて場違いな程の呑気な声を上げそうになったが、秋空はそれを理性で押し留めた。

ここで、場の雰囲気を崩すのは勿体無い。

「音哉君…」

秋空が声を出さなかった代わりに、秋空の横に座った女性――秋空の母だ――が困ったように、男性の隣りに悠然と腰掛けている存在――音哉の名を呼んだ。

子供達に動揺はないが、大人達は違うらしい。

ちなみに、強烈な問題発言をかました秋空の同世代の音哉は、非常に整った顔立ちに嘲りに近い表情を浮かべ、目を細めたまま秋空を見下ろしているだけ。

秋空はソッと息を落とすと、リアル修羅場を泣く泣く緩和させようと、控えめに右手を上げて眼鏡の奥でにっこりと微笑んだ。
「龍哉さん。お気になさらずに。お母さん。私が気にするような性格だと思う？」

本日のテーマは再婚の顔合わせ。

龍哉さん、という秋空の名前を噛みながらくちにした男性は、つまりは義父になる予定の存在だ。今回の再婚について、龍哉の息子である音哉が反対らしいというのは、今回の顔合わせではっきりきっぱりと宣言された。
開口一番に、「オタクかよ。気持ち悪いな。これが義姉なんてありえない」と言ってくれたのだ。
言われた秋空だが、母親の再婚には一切興味を示さなかった。母親が後悔しないなら反対するつもりなんて初めっからなかったのだ。その結果、通学路で車に押し込められ、制服のまま義弟候補と会う事になるとは思わなかったが。
「あきちゃんが動揺したのは見た事がないけど…」
戸惑いながらも言葉を口にする母親――恋歌に、秋空はコクン、とこれみよがしに頷く。
「そそ。子供は巣立つモノ。最終的に大事なのは夫婦の関係。お母さんと龍哉さんの事を反対する気はまったくないんだ。
そっちの息子さんも、たかが一年と半年我慢できないわけじゃないでしょ？　それにもう高２だし」
嫌だ嫌だと父親の将来の事を考えずに我侭なんて言わないよな？とばかりに、口元に笑みを乗せる。秋空としたら、今回の件は纏まってほしいのだ。
あの人見知りな母親が、こうして再婚をしたいと思えた相手だ。出来れば手放したくは無い。
「時間さえ経てばある程度の情はわくと思います。イヤよイヤよも

好きのうちなんて事には百パーありえませんけど。あぁ…龍哉さんは別、ですよ？　お母さんが好きになった相手ですから、それだけですっごく好感持ってます」

分厚い眼鏡によって阻まれた満面の笑み。

龍哉はずっと欲しかった娘に好感を持ってます、と言い切られ、つい頬を緩めてしまう。この時点で、自分の息子の問題発言は何処かに飛んだらしい。

「俺も、おたく以外には…恋歌さんみたいな母親には憧れてますよ」

秋空に対抗したのか本音なのか。非常に判断が難しい所だが、音哉が好きじゃないのは秋空だけだと言い切る。が、その後に言われた言葉が嬉しかったのか恋歌の頬も緩む。龍哉が娘を欲しかったように、恋歌はずっとずっと息子が欲しかったのだ。

当然我が子は可愛いが、異性の子というのはまた別格なのだろう。

子供達の歩み寄る気はまったくない言動とは裏腹に、トントン拍子に進んでいく再婚話し。

新たに増える父親母親にはまったく抵抗のない子供と、ずっと欲しかった息子娘に照れながらお父さん、お母さんなんて言われてデレデレになる両親。パッと見だけは仲睦まじい親子。勿論、子供達を除いて、である。

この場合、一緒に暮らせば情ぐらいは沸くだろうという秋空の意見を採用し、一月も経たない間に身内だけの簡単な式をあげ、その足で新居へと向かう。

運転席には龍哉。助手席には秋空。その後ろには恋歌。その隣りに音哉。

あっという間に過ぎ去った一ヶ月。その間も顔を合わせなかった日はないぐらい交流を深めていたのだが、子供同士の横の交流が生まれる事は一切なかった。

ここまでくるとある意味清清しいものである。

ある意味その交流の無さに慣れてしまった両親は違和感を覚える

事もなく、仲の悪さに嘆く事もなく、新居での新しい家族の生活が始まった。

ちなみに、秋空と音哉の部屋が隣同士というのは、両親のせめてもの希望だったのかもしれない。

だがしかし、秋空と音哉がそんな事で歩み寄るような可愛い性格をしていたら、元からあんな爆弾投下はなかっただろう。

互いがすっかりと空気と化している事に両親は気付かず、家族がのんびりと過ごせるようにと願いを籠められた憩いのリビングには、一応四人が揃う事になる。

あくまで一応なのだが、やはり子供たちは気にせず、両親は可愛い子供にデレデレとしたままそれに気付く事はなかった。

金城と聖城の一方通行図

「実はね、親が再婚して苗字が変わったんだ。で、鈴乃音(スズノネ)から小日向に変わったんだけど、とりあえず繊細な高校生って言う時期だから、鈴乃音のままいくけどよろしくねー。家に遊びに来る時の表札だけ気をつけて！」

「長台詞ね」

「一気に詰め込んでみたよ。説明とか長々するの面倒だし」

「アンタらしいわね」

と、月曜日の週初め。邂逅一番に腐れ縁である、腰まで伸ばした艶やかな黒髪と、美人の代名詞のような切れ長の眼差しと長い睫毛が非常に美しい比良(ヒラ)玲奈(レイナ)に、秋空が待ったなしで一気に説明を終わらせた。一息である。物凄い勢いというわけじゃないが、口を挟む事も面倒で玲奈は最後まで聞いた後、思った事を聞いてみる。

再婚についての感想はないらしい。

「じゃあ、自宅は変わった？」

前はアパートだったわね、と思って尋ねてみれば、秋空が頷くのを視界に納め、ふぅと溜息をついてしまう。

「んん？　溜息？」

「あの小さな感じが良かったのよ。遊びに来る時気をつけても何も、その前に自宅の場所を教えなさい」

「ラジャです！　じゃ、今日さっそく来ちゃう？」

箱に詰められた秋空の宝物は既に棚に収められ、前の部屋とほぼ同じ配置になっている。変わった点といえば、新居の方が広い為、新しい棚が増えたぐらいだ。そこには今まで箱に収められていた出

し切れなかった資料関係を置いたのだが、まだ余裕があるのが嬉しい誤算というやつだろう。
思わず語尾が弾むのだが、玲奈はソレには触れずに同じ目線の秋空の顔をジッと、これでもかという程凝視してくる。ジリジリと焼かれそうな程の鋭い視線。元々目つきの悪い玲奈だが、今回の事は再婚相手だろうと秋空は鞄から写真を取り出し、それを玲奈の手に押し付けるように渡す。
会う可能性があるなら、写真は見ようといった所だろう。

「…あら、いい男ね。おばさんと並ぶと美男美女なんじゃない？」
「龍哉さんね。ホント様になるんだよ。で…これが、龍哉さんの息子の音哉さん」
突っ込まれる前に、写真の音哉を人差し指で突っつく。
「似て…る。うん、特徴は似てるわね。で、この制服って…」
パッと見、龍哉と音哉は似ていない。音哉の方が色素が薄いのだ。その辺りは、外国に旅立ってしまった母親が関係するのだろうが、流石にそんな込み合った事情は聞いていない。
だが、それよりも玲奈が目をつけたものが、制服。
紺色のブレザーという特に目立ったものなど何もないという、高校の制服。しかし、玲奈はこの制服には嫌という程見覚えがあった。見覚えがあるのは玲奈だけではなく、この学園――金城（カナシロ）学園に通う者には馴染みのある制服だったりもする。
「聖城（セイジョウ）なんだ。音哉君？」
「そそ。聖城学園。面白いでしょ」
ニンマリと、実体験後とばかりにからかうような秋空の言葉に、ピクリ、と玲奈の眉が動く。
「アンタ…何か言われたでしょ？」
どうせリアル修羅場だすっげー、なんて叫んでたんじゃないの？
何て呆れ混じりに呟けば。
「……」

ギクリ、と秋空の体が不自然に揺れる。
切れ長の眼差しを更に細め、玲奈は腕を組み、仁王立ちで椅子の上に立つと秋空を見下ろす。
「玲奈って、絶対領域を作らないタイプだよね」
「相変わらず空気を読まない頭ね」
「嫌だなぁ。そんな私は私じゃないって」
「そうね。態とだものね。まぁ、いいわ。
な・に・を・言・わ・れ・た・か・白・状・な・さ・い？」
一言一言をはっきりと発音する玲奈に、どうしたものかと目線をさ迷わせる。秋空にとってあの件はリアル修羅場もどきで、非常に良い経験をさせてもらったのだ。しかも一ヶ月前。今更な事を報告するのもなぁ、と渋っていたら、耳の横でぐしゃり、と非常に心休まらない音が響き渡る。
玲奈が鞄にいれていたペットボトルを握りつぶした音で、ぽたりぽたりと足元に水がこぼれ、染みを作っていく。
「これさえなければ、深窓の令嬢って感じなのにね」
「あら？　これがなくても深窓の令嬢よ。美人でしょ？」
「自分で言い切っちゃってまぁーいいんだけどさー。玲奈美人だし」
「ふふ。わかっていればいいのよ。で、勿論白状してくれるのよね？」
がっしりと両肩を掴み、話してくれるまで逃がすつもりなんてないとばかりに玲奈は微笑を浮かべる。学校は一体いつから尋問所になったのだろう。別に話す事に抵抗は無いのだが、萌えポイントがあっただけにどうやって話そうかを迷ってしまう。
「はぁ…」
迷いつつ迷いつつ、息を1回だけ吐き出し呼吸を整え、観念したように両手を上げた。
「オタクかよ。気持ち悪いな。これが義姉なんてありえない――って一ヶ月前に言われたんだけどね。金城と聖城なら、仕方ないし当たり前だし……それに、私の場合はあれが初、だったんだよね」

「……」
秋空の言葉に、玲奈は半眼のまま秋空を見下ろした。
仕方ないし当たり前だし、と一刀両断出来る程、金城と聖城の生徒所か教師陣も仲が良くない。

学園の創業者が従姉弟同士という間柄。強いて言うなら聖城が本家。金城が分家の人間が運営。聖城は県内トップクラスの偏差値を誇る学園で、金城は県内のみならず、日本国内でも特殊な癖のある学園として知れ渡っている。勉強だけなら比べられるはずの無い徒歩五分程の距離にある互いの学園。
だが、世の中に出た後は……何故か金城学園の卒業生の方が名が売れるのだ。勿論良い意味の方で。
一芸に秀でてさえすれば入学できる金城学園。簡単に言えば、おたくの集まり。自分の興味のある分野をトコトン追求する姿勢。部活に至っては、全てに研究科という前置きが付き、部員数が一人であろうとも結果さえ出せば部室を与えられるというある意味実力重視。
そんな金城学園の生徒は、我が道を突き進むだけ。例え徒歩五分の場所に県内トップクラスの高校があろうが、興味が無いから視界にさえ入らない。だがそれと反比例するかのように、聖城よりも別の意味で名が売れまくった金城学園の生徒を、何故か聖城学園の生徒は敵対視しているのだ。
それは顔を合せる度の一方的な敵視。意味不明な言い掛かり等でわかってしまうのだが、残念な事に、精一杯言い掛かりをつけているのにもかかわらず、それに気付かず素通りする人間が多い。
つまりは眼中外。
それが、尚更どこかの劣等感か自尊心を刺激するらしく、伝統的になってしまう程一方的な敵愾心は続いている。
聖城にとって、金城の人間はおたくで内向的で引きこもり。いつも何をやっているか解らない関わり合いになりたくない一般人では

ない存在。

ぅわ。おたくってマジでキモイ。

と、勇気を振り絞ったであろう聖城学園生徒A君。金城学園生徒B君とCさんがニンマリと発した言葉は、A君をその場に縫いとめ、救出されるまでそこから一歩も動けずにいたという伝説の一方通行図。

おたく最高！　万歳！

ぅわー。アンタ良い人。マジで良い人！　俺たちって見るからにおたく！　いいね、研究者魂燃えるわー。

と、心の奥底から感動を表すB君とCさんに握手を求められたのだから、A君は人外を見るような眼差しを向けていたらしい。

秋空はまだそういう現場に立ち会った事はなかったからこそ、一ヶ月前の音哉の発言は感動モノだった。初、ナマで聞けちゃいましたよ聖城学園生徒のおたく発言！

「…初、ナマで聞けた感想は……サイトの充実振りが証明してるわね」

「流石親友。よくわかっていらっしゃる。リアル修羅場的空間。場の雰囲気を和ませるのが勿体無くてね！　それでさー、あれからずっと目が合わないんだけど、嫌なんだけどついつい私を見ちゃう音哉さんが面白くてね…でも、何で金城ってだけであそこまで意識するのかな？」

まったく堪えていない秋空に、玲奈は呆れたように溜息混じりに息を吐き出すと。

「生真面目な子が多いんじゃないの？」

つまりは不良に憧れる優等生、みたいな感じかしら？

「ぉおおお。いいねいいね、その設定！　王道って感じで勿論ヒロインはくりっとした目が可愛い女の子よね！」
「知らないわよ」
秋空のツボに触れた玲奈は、迷わずに席へと戻ると鞄の中から文庫本を取り出し、迷わずにページを捲り始めた。
真後ろの席からガリガリとシャーペンを走らせる音が聞こえるが、いつものように秋空が設定資料を作成している音だろう。しかも周りを見回せば、そんな光景は珍しいものじゃない。
「（まったく相手にされてないのよね。素でかわされちゃって。まぁ…精々ちょっかいかけて、彼らにネタの提供でもすればいいわ）」
聖城学園の人間がちょっかいをかければかける程、彼らに触発された金城学園の人間のサイトが充実するのだ。それを愛読する玲奈としてみれば、そういった意味でつい聖城の人間を応援するのも仕方ない事なのかもしれない。

「お母さん何してるの？」

思わずそう聞いてしまった秋空だが、それも仕方ないだろう。玄関に置かれた旅行用のバック。明らかに中身をギッシリと詰められたソレ。しかも二人分に加え、玄関に置いてある磨かれたばかりであろう余所行きの靴。これも二人分。

これは両親の靴と鞄だろうという事だけはわかるのだが、それが何故玄関に置いてあるのかが解らない。わかるけど、わかりたくない。

秋空が隠す事無く怪訝な表情（カオ）をしながら母である恋歌に説明して、と言わんばかりの視線を投げかければ、語尾が弾ませた言葉が返ってきた。

「これから龍哉さんと旅行に行くの。新婚旅行ね。アキちゃんは料理も作れるししっかりしてるから、お母さん安心して行けるわね」

「……」

行けるわね？

行けるわよね？

恋歌の笑顔のプレッシャーに押し負け、秋空はギギギとぎこちない音を立てながら時間をかけて首を縦に振る。こうしなければいけないんだというどうしようもないプレッシャー。おっとりとした見た目でも流石は自分の母親。侮れないぜ。と思ったりなんかもしたのだが。

「あらタクシー。じゃ、行ってくるわねー」

「（あらじゃないでしょうがお母様）」

明らかに恋歌の手からは余る鞄二つを楽々と持ち上げ、語尾を弾ませるどころかスキップをしそうな勢いの恋歌に、声には出さずに不満を漏らす。
「何かしら？」
その瞬間足を止め、軽やかに振り返った恋歌に、秋空は勢いよく首を横へと振った。
これに、逆らっては、いけない。
リンリンリン、などという可愛らしい警告音ではなく、突貫工事か的な音が秋空の脳裏に鳴り響く。
「うううん。お土産楽しみにしてるね！　気をつけて。怪我しないように。お腹出して寝ないように！」
「あらら。アキちゃんってば心配性ね。大丈夫よ。アキちゃんも気をつけてね」
「はぁ～い」
先月、全部お母様がやった事ですよ？
と、本音は決して口にしない。寧ろ考える事もしない。恋歌の姿が玄関の外へと消えた後、漸くそんな事を考えれた秋空は、疲れ果てたようにその場へと座り込んだ。どうして考えている事がわかるのか。
動物的な直感を持っているのかどうなのか。兎に角心の中は読まないで欲しいと心底思いながら、ここにきて一つの結論にぶち当たる。
「あははー。音哉さんのご飯作れって事かぁ」
食べるかな。
どうかな。
絶対食べないよね！
非常に仲がよろしくないの、忘れまくっちゃってるよねお母様～。

学校用の鞄を胸に抱き、そこに額を押し付けるように暫くぐったりとくたばっておく。傍から見たら異様な光景だが、それでもいい。両親が揃って出かけたならこんな姿は見られまい。

「……」

はぁ。

「……っつーか、新婚旅行って何処よ。いつまで行くんだかもっと早めに教えてよ流石にさっ」

携帯という文明の利器があるのに。メールという手段を秋空以上に使いこなしているのに。それなのに、学校から帰ってきた秋空を出迎えてそのまま旅立っていった恋歌。きっと、前もって言っていたら色々と説明が面倒だったからだろう。

全てを丸投げしていった恋歌と、恐らくそれを知らない龍哉。知っていたらきっと、なんだかの言葉を貰えたんだろうかと思うとちょっと悲しくなる。

ガックリと項垂れていたら、いつの間にか音哉が帰ってきたらしい。ドサリ、と玄関に置かれる音でそれに気付いたが、顔を上げる気力も無く。

「おかえりー」

と、言葉だけでお出迎え。

あんな居た堪れない空気だって両親がいるからまったく気にならないのだ。作った料理を目の前で拒絶されたら、流石の秋空だってへこまないわけがない。多分。そう思う辺りでへこまないだろ？なんて自分へ突っ込みが入るのだが今更だろう。

「（そうだ。今日は空気読まないイチャイチャラブなツンデレカップルな短編を書こう。今なら書けそうな気がする！）」

普段は専らファンタジー。ちまちまと乙女の夢という名の逆ハー状態にするのが好きなのだが、いつもは書けないバカップルが書けそうだと気分を入れ替えようと試みる。この時点で、すっかりと音哉の存在は抜け落ちていた。

挨拶をしないのはいつもの事。言葉を交わさないのもいつもの事。だから、項垂れている秋空を遠慮なくほっておいて部屋に戻っていると思ったのに、顔を上げて見れば何故かまだ音哉が靴を履いた状態で突っ立っていた。

「何してるの？　あ、多分三時のお八つは用意してるはず。お母さんが忘れるはずないし。旅行に行ったみたいだけど……あ、知ってるんだ」

何を今更？

そんな凍える視線を向けられ、娘に何故報告しないのお母様。と、この短時間に何度か思った言葉を思い浮かべる。

「ご飯は作ってレンジの中にいれておくから」

食べたかったら勝手に食べてねと言わんばかりに、秋空は重たい足を引きずるように靴を脱いでリビングへと向かう。まず初めにやる事は、エプロンを身に付け夕食作り。一度部屋に戻れば外に出る気力は無いだろうと、先に必要最低限の事をやる為に忙しなく動き出す。

両親が結婚した後も、台所管理は秋空のまま。両親が揃って仕事をしているというのが一つ。もう一つは、恋歌よりも秋空の方が料理の腕が確かだからだろう。

朝食、夕食のみならず、家族のお弁当――本人希望の為一人除く――作り。これで小遣いに色をつけてもらっているのだから、不満などあるはずもなく日々食事作りに勤しんでいたりもする。バイトをするよりも割がいいのも、やる気をアップさせる秘訣だろう。

リズムよく包丁の音が響き、手際よく料理を作っていく。本日のメニューは和風あんかけハンバーグ。キャベツとブロッコリーを皿に盛り付け、メインのハンバーグをのせる。見栄えよくあんをかけるが、足りなかった時の為に小さな器にソースを用意しておく。

家族で囲む食卓なら、ほんわか温まるようなうどんが良かったのだが、いつ食べるか。もしかしたら食べないかもしれない相手に、のびる食事は用意出来ない。

「はぁ……作ったけどお茶漬けで食べよ。あ、そうだ。明後日実力テストじゃないですか。今回はどんな問題が出るのかなぁ。さぁて、サクッと食べてお風呂に入って部屋でパソとお友達〜」
こういう時は何も考えずに趣味に突っ走れ。あは、と不気味な笑いを浮かべながら、一人で椅子に腰をおろし、早めの夕食を胃へと流し込む。
玄関で会ったっきりの音哉は部屋に閉じこもっているのか、物音一つ聞こえてこない。
新築の新しくて綺麗な家。前のアパートとは比べるまでも無い広い部屋。

「せんちめんたるちっくなのねー」

秋空にしたら珍しく。
本当に珍しく。
広い部屋が寂しいなぁ、なんてポツリと弱音が漏れた。
その小さな呟きは誰にも聞かれず、ただ空気に溶けて消えるだけ。
秋空本人でさえそう思っていた呟きをまさか拾われていたなんて思わず、使った食器を洗って部屋へと戻る。

「……こういう場合、何て言えばいいんだ？」

リビングへの入り口が二つあったのが良かったのかどうなのか。
歩み寄る機会に気がつかない秋空と、歩み寄る機会を逃した音哉。
今更なコミュニケーションは難しいと、ＩＱは高いが対人関係には弱い音哉が、ポツリとそんな言葉を漏らしたのだった。

義姉にデレを見せれない義弟（後書き）

不器用？な音哉と、鈍い秋空。

共同戦線を張れ　（1）

恋歌を送り出してから早一週間。龍哉からさりげなく旅行の詳細を聞いたのだが、どうやら新婚旅行と会社の出張を兼ねているらしい。

そんなんで堪能できるのかどうなのか。

気になって聞いてみれば、マイペースを地でいく龍哉と恋歌には関係ないらしい。その期間を聞いた瞬間は受話器を落としそうになったのだが、それも仕方ないだろう。

年頃の男女。しかも血の繋がりのない思春期真っ盛りな二人を置き去りにして、何か間違いがあったらどうするつもりだと、声を大にして叫びたい。

実際は在り得なさ過ぎて、逆に笑いが込み上げてくる。だがしかし、その辺りの心配はお約束だろう。

お約束ならばぜひとも口にせねばと言ってみたら、玲奈から冷たい視線を頂いた。

「いいじゃない。お約束って大事だよー。自分じゃ体験出来ないけど王道みたいなね」

実力テストという夏休み明け早々の面倒な行事が終わり、背中に羽が生えたような開放感に、秋空はついつい在り得ない事を口にしてみる。

そんな仲になる以前に、未だにコミュニケーションを満足にとれていなかったりもするのだが。

「会話時間１０分未満が何を言ってるのかしら？」

「あはは。そうなんだけどねー。おかしいね。夏休み前に会ったからもう一ヶ月以上？　それで会話が１０分未満ってありえないね」

口に出してみれば、同じ屋根の下に暮らしているとは思えない程の会話の少なさ。両親の新婚旅行をきっかけに、顔を合せない日さえ出てきたのはきっと、気のせいではないはず。
「実力テストの後はやけに頭が軽くなるのね。今まで何が詰まってたのかしら？」
玲奈の細長い人差し指に、ツンツンと突かれる秋空の額。
「前は公式。今は夢と願望と欲望かな」
「そうね。貴方の頭はそんな感じよね。義弟君の事をあえて口に出さない所もアキらしいけど。でも…」
「でも？」
わざとらしく語尾を濁らせた玲奈。わざとだと解っているが、それにのっかり耳を玲奈の方へと近づけながら続きを待つ。
どことなく語尾が弾んでいるのは、玲奈が仕入れた情報によるものだろう。そのルートはどうなっているんだと気になる程、玲奈の情報網は凄いのだ。
「そろそろ文化祭の準備よね」
気になって耳を近づけてみれば、突然の学校行事のお知らせ。
「そうだねー。去年のメイドさん喫茶は良かったよね。絶対領域はやっぱ捨て難いわ」
デジカメでパシャパシャと撮りまくったら、何でか購入希望者が殺到。遠慮なく売りまくって、クラスの打ち上げが豪勢になったのは今でも印象に残っている。
秋空はギャルソン。玲奈は伝統派のメイド服。長い紺のスカートと、機動性を重視したシンプルな純白のエプロン。勿論秋空希望の絶対領域を披露する事はなかったのだが、これはこれでいいという客が数多く集まった。
この時、伊達である分厚い眼鏡を取っ払われ、素顔で接客する羽目になった秋空としては、その点だけは思い出したくない過去だったりもする。
だからこそひたすら人物を撮っていたのだが、今年もその線で行

こうと密かに心に誓いながら玲奈の顔を伺う。

「……」

形の良い唇で弧を描き、頬杖をつきながら目を綻ばせる。我が親友ながら絵になるわー。と拝みたくなるが、嫌な予感がするので真面目な表情を浮かべ、無言のまま続きを足す。

「今年は…」

「今年は？」

「聖城と合同開催に踏み切るらしいわよ」

散々もったいつけた玲奈だったが、思いの他あっさりと爆弾を投下する。

「文化祭は展示だけっていう聖城が、金城の勢いについてこれんの？」

割合なんでも有りな金城学園。物の売買も相当されるし、プライベートな同士も来る。フィギュア部やら料理部やら手芸部等が力を込めすぎた作品を販売し、それに続けと言わんばかりに小規模な部活が突っ走る。

それと同時進行で行われるクラスの催し。一学年一クラスは劇や演奏をやる事が決まっており、悪ふざけした面々が相当盛り上げるのだ。

後は飲食系学年毎に一クラス。他には展示やお化け屋敷や参加型企画等。学園全体でこれでもかという程打ち込み、近隣住民のみならず、遠くからも足を運んで貰えるような催しが盛り沢山。それと比べると、聖城の文化祭は厳粛な空気も勿論の事、大体が学校関係者が展示物を見学して終わりというシンプルなもの。

「さぁ？　経営者の考える事はわからないけど。とりあえずアキは空いた時間は部活の出し物を中心にした方がいいかもね。どうせ色々と発売するんでしょ。書き物部としては」

「発売はするんだけどねー。クラスが何やるかわからないし、ちょっと保留しとく。共同戦線を張るってのも気になるし」
これだけ仲の悪い生徒同士を、どうやって歩み寄らせるのかと興味をひくが、態々それを見学する為に残るぐらいなら、秋空としては自室でパソコンとお友達する事を迷わず選んでしまう。

「しっかし…聖城と共同戦線かー。うーん。出来るなら関わり合いになりたくないや」
正直、聖城との共同戦線で音哉と関わったとしても、自宅以上に喋れる気はしない。聖城は金城の生徒に対して冷ややかな眼差しを向けてくる。その聖城の人間が沢山いるのに、新しい姉。金城学園に通ってます。なんて説明は態々したくないだろう。
そんなしたくもない説明をされて、自宅の雰囲気が悪くなるのだけは正直避けたい。
両親が関わらなければ、滅多に体験出来ない凍るような雰囲気を楽しんだりもするのだが、一歩間違えると致命傷になりかねない。
珍しくも第一線から退く事を仄めかした秋空に、玲奈は意外そうに目を見開き、コテン、と間抜けな音をたてながら首を傾げる。
「いやいやいや。お母さんがいなくて家が広くてね。ちょびっと堪えているのですよ実はね。だからあんまり刺激したくないなぁって思ってさー。どちらかっていうと、あっちの方が過剰に反応しそうだし。私の義弟です～なんて紹介してさ、皆に囲まれたら尚更金城嫌いになりそうじゃない？？」
「否定出来ないわね」
「でしょ？　悪化はさせたくないんだよねー」
「わからなくもないけれど。でも、ここまでくると中々歩み寄れたりはしないのね」
これ以上距離をあけたくないと言いながら、歩み寄る素振りは見せない秋空。誰とでも仲良くなる秋空を考えれば珍しいと思うが、どうやら色々と考えているらしい。放置した期間が長いと逆に、ど

うやって距離を詰めて良いかわからなくなるのかもしれない。

「義弟君が学校で気まずくなっても嫌だものね」

何処か納得したように玲奈が頷く。

金城嫌いの聖城。

金城の生徒と仲良くしていたというだけで、いじめが起こったのは実際過去に起こった事。黒歴史として閉口令がひかれているが、人の口に戸はつけれずといった所だろう。

「いや。単にそんな馬鹿げた理由で義弟君がいじめられたら、私が嫌な気分になるというかね。自分が嫌だからやらないっていうかさ！」

「まぁ、わからなくないけれど。でも、これで向こうの印象が変わるわね」

「…？　変われればいいけど。変わってくれたら平和的だけどね～」

印象が変わってくれたらそれが一番だと、秋空は玲奈の言葉にほんの少しだけ首を動かして頷く。聖城の伝統的な一方通行図は正直気にならないが、最近では少しだけ音哉と仲良くしたいかな、と思い出したのだ。

その理由としては、この一週間の音哉の態度が関係していたりもする。元々、秋空が作ったという理由でお弁当も拒否していた音哉。食事を作った所で両親が居ない状態で食べるはずないと思い込んでいたのだが、食事を共にしないものの、音哉は秋空の作った物を綺麗に食べてくれる。

単に買いに行くのが面倒だったり、栄養が偏るからだったり、こんな事で小遣いを使いたくないだけかもしれないが、それでも…。

食べないと思っていた相手が食べて、秋空の認識に少しだけ変化が訪れた。多分というか絶対、両親がいたら起こらなかった変化。

そんな変化を身近で見てきた玲奈は、この時ばかりは微笑ましげに秋空を見ていた。まるで頑張って、と言わんばかりの表情で。

「玲奈…ありがとね」
頬を朱に染め、ぽそり、と照れくさそうに言う秋空。それを笑みで受け止め、首を横へと振る玲奈。
これだけ見ると親友同士が友情を深めているようにしか見えないだろう。
玲奈が言葉を発するまでは。

「というわけで、実行委員お願いね」

「はい？　実行委員とな？？」

何だろう。その初めて聞いちゃったけど聞きたくなかった響きをもつソレは。
「互いの高校を行き来しながら文化祭を盛り上げる責任ある委員会よ。私も実行委員よ。嬉しいでしょ？　頑張りなさい」
容赦なく言い切られ、秋空のあずかり知らない場所で実行委員に名を連ねさせられているのだという事実に、さっきまでの良い雰囲気は何だったんだと叫びたくなってくる。玲奈相手に無駄だと心底わかってしまっている為、やらないが。
「玲奈さん…（あのね。関わり合いになりたくないなぁっていうかさ。前線から退きたいなぁって感じで玲奈も納得した感じだったよね～っていうのが超本音なんだけどなんだろう。しかも実行委員って一番面倒な委員じゃない？　あんな難しい学校と歩み寄る為にパソに向かい合う時間を減らしたくないんだけど。でも口に出して言ったら怖いっていうかさっ）」
「実行委員をやるとね、内申が上がるのよ？　勿論、協力してくれるわよね？」
一週間前にも感じた突貫工事並みの警報が再び、秋空の脳裏に鳴り響く。
関わり合いになりたくないと宣言したが、その警報に背筋が寒く

なる感覚を覚えながら、秋空は机に突っ伏した。

「……誠心誠意、頑張らせていただきます」

目に見えない圧力に再び、心が折れた秋空。

「実行委員で切り盛りすれば見る目変わるわよ。寧ろ変わらせるから。遠慮なく――いくわよ？」

フォローなのか何なのか。それとも巻き込んだお詫びなのか。

悠然と微笑む玲奈を視界の隅に収めつつ、ソッと視線を外した。

確かに、玲奈ならばやれてしまうだろう。

「いつまでも秋空を認めない義弟なんて、蹴散らしてしまいなさい」

続けて言われた言葉に、視線を逸らしたまま秋空は頬を引き攣らせた。

どうやら、秋空が然程気にしていなかった義弟と不仲という事実だが、玲奈は相当気に掛かっていたらしい。

だがしかし、蹴散らしてどうしろというのか。

何となく、玲奈と義弟は会わせない方がいいんじゃなかろうかと、今後のお約束などまったく考えずに、本気でそんな事を考えていた。

共同戦線を張れ　（2）（前書き）

※秋空視点です。

共同戦線を張れ　（2）

ハァ、と、深い溜息が口から漏れたけど、それも仕方ない。今頃、部活に励むかクラスに貢献するかのどちらかだったはずなのに。

それなのに。自分には一生縁のないと思っていた聖城学園の校門を潜り、尚且つ会議室という名のだだっ広い部屋の隅にある椅子へと腰を下ろしている。私の周りには金城の面々が座っているし、実行委員メンバーって言っても、その中でも平扱い。あまりプレッシャーはないはずなんだけど。

うん。プレッシャーはまったくない。ここに来るまでの間も不躾な視線をものすっごく向けられたけど、自分でも驚くほどまったくなかったりする。あぁ、うん。自分って神経図太いなぁ、なんて今更な事を再確認してたんだけどね。

キョロキョロと辺りを見回してみれば、金城よりもかなり広い会議室。壁に貼ってあるのは進学校らしい真面目な掲示物。金城（ウチ）とはまったく違うわー、っていうのも今更な事。

「アキ」

「んー。暇で」

玲奈から、静かな声音で名前を呼ばれたんだけど。この短い言葉に込められた意味は、静かにしなさい、と。キョロキョロしないって事。

けれど正直に言えば、仕方ないなっていう感じで苦笑を浮かべられた。ふわり、と微笑むような微笑。眼福眼福ー。見慣れてるけどね。見慣れてるけど、やっぱ美人さんが微笑むと眼福なんだよね。

「大丈夫よ。短時間で終わらせましょう。見世物になるのは好きじゃないの」

「……大丈夫？」
「えぇ」
なんていうか、玲奈らしいんだけどね。金城っていうのもあるけど、玲奈ってば美人だから、ジロンジロンと無遠慮なほどに視線が送られてきちゃったりもするんだけど。本人も慣れてはいるんだろうけど、常にだからちょっと疲れたのかなぁ。
ある意味引き立て役の私もいるしねー。尚更美人が引き立つっていうかね。
そんな事を考えてた私の頬を、玲奈が頬を引き攣らせながら引っ張ってくる。大体、こういう事を考えた時は何かしらやられるんだけど。
今回は頬を引っ張る事だったみたい。
「何を考えてるのかしら？」
「ふわんごごごご」
「何を言ってるかわからないわよ？」
「ほほ」
「ぷにぷにしてるわねぇ」

何だこの羞恥プレイは。
聖城の実行委員の面々が入ってきた後も、玲奈のお仕置きの手は止まらず。しかもぷにぷにとか！　密かに気にしてるぷにぷにを！
ぅぅぅぅぅぅ。と小さな唸り声をあげていたら、ものすっごく凝視されてる事に気づいた。視線が突き刺さるというか。この視線に気づかない程私は鈍くはないよ？　流石にね。
玲奈の羞恥プレイに耐えながらも、目線だけを動かして突き刺さる視線の元を見てみれば……。

義弟君がいた。

いちゃったよ？　義弟君？

玲奈さーん。

助けを求めるような色を瞳に宿してみれば、玲奈がさっと、何事もなかったかのように手を離してくれた。と同時に、私の視線の先を追った後――にこりと、華やかな笑顔を浮かべてみせる。

……。

玲奈の友人の私だから言える。

これは、百パーセント外面だって事が。

慣れてる私から言わせてみれば、背筋が寒くなりそうなぐらいの白々しい笑顔。

「あら。初顔合わせね。前にお邪魔した時は会えなかったし。彼が、メンバーなら話しが早いわ」

好戦的な笑み――知らない人が見れば美人の微笑――を浮かべ、玲奈は姿勢を正す。その影に隠れるように、こっそりと存在感を消す私。

話し合いには参加しますよ？

しないと玲奈が怖いからね！

けど、こういう時は存在感を消して空気になるのよ！とばかりに、玲奈の影に隠れて様子を伺う。とりあえず情報を集めないとね。義弟君以外は知らないし。寧ろ義弟君も知らないけどね。

何かさっきからチランチランと私の方を見てるっぽいんだけど、それらは全て玲奈に阻まれたりなんかしたりしてね。私に届く事はなかった。

ちなみに、実行委員のメンバーは学年毎から各三名。二年からは、私と玲奈と、隣のクラスの城崎（シロサキ）　譲（ユズル）君が参加してたりする。城崎君も玲奈と同様大変素晴らしく顔の良い方なんだけどね。

柔らかな髪質。色素の薄い髪は日に透けると金茶でね。瞳の色は

青色っていうか、そのまんまハーフな人。笑顔は穏やかで優しげ。
多分、これも玲奈と同様に聖城にもファンがいるんじゃないかなって思ってるけど……口を開くと結構残念な人だったりする。
同類の金城の面々はひかないけどね。
寧ろ同士よ！って叫べちゃう間柄だけどね？
なんていうか、無節操な人？　あ…私と同類っぽいけど、決定的に違う事もあったりする。私は二次元においては無節操。胸を張って言えるけど、ＮＬでもＢＬでもＧＬでも何でもオッケー。気に入ったものはドンとこいやーって感じ。
ソレは城崎君も同じ。男性向けでも女性向けのゲームでも漫画でも小説でも、自分が気に入ればドンドン読んじゃいますよーってね。

でも。決定的に違うのはね。
城崎君の場合は、それがリアルにも適応されるって事。

「……」
玲奈の肩口から城崎君を見てみれば。
「ん？」
にこっと微笑まれた。うん。眼福な笑顔。一年や三年の実行委員の面子も、個性派だけどね。多分金城を誇れる個性派揃いだけどね。
この言い方だと、自分も個性派に聞こえるからヤだなぁ。玲奈と一緒にいるから個性派に見えるのかなぁ。玲奈の個性は輝いているし。
「（うなっ）」
そんな事を考えてたら、玲奈からわき腹を小突かれた。ぉぉう。わき腹は弱いんだよ。擽ったいし。
「あーき？」
「何でもございませんよ。本当になんでもございません？」
「何で疑問系なんすか？」
語尾にはてなをつけてたら、玲奈じゃなくて右側から突っ込みが

入った。そういえば君がいたね。
「……俺がいるの、気づいてなかったんですか？　そりゃないでしょう。こんなに懐いてるってのに」
俺は悲しいです。何て言いながら、目元を右手の人差し指で拭うという寒い泣き真似を平然とやってのけるのは、一年の相田悟君。この子もゲームの趣味があってねー。よく話すんだ。
爽やかなサッカー少年っぽいんだけど、この子も所詮金城に染まりきった個性派。研究科書き物部の後輩でもある。
「はいはいはいはいはい」
「はいが多いですよ。アキ先輩」
「あらあら。貴方も実行委員のメンバーだったのね？」
今度は、左側から玲奈が突っ込んできた。私にじゃなくてね。悟君にね。玲奈って実行委員の副委員長じゃなかったっけ？　三年の一人が委員長。二年から副委員長。一年から二人のサポート。で、他の六人が実行部隊。だから玲奈が知らないはずはないんだけど…。
そんな私の疑問を他所に、何でか二人で寒々とした言葉の応酬を始めたりなんかしてね。間に私がいるもんだから、すごく居心地が悪いんだけどなんだろう。席替えてくれないかなぁって他のメンバーを見たんだけど、サッと視線を逸らされた。
……うちの力関係も分かりやすいね。
しみじみと呟いてると、別の箇所から視線を感じて顔を上げてみた。
「……玲奈。悟君。始めるみたいだよ。静かにしようね？」
多分聖城の実行委員長。始めたいんだけど？なんてあからさまな視線を向けてきてるのは別にいいんだけど。
こういう時、一方的な敵視って言う意味を理解したりなんかしちゃうんだよね。

「「……」」

私の言葉に、二人はごめんね、とばかりに回りに輝かしい笑顔と愛想を振りまく。そういえば悟君ももてるんだよね。可愛い顔してるし、将来有望株っぽいらしいし。

こうしてみると、金城って美男美女率が高いんだよね。

「先輩。これのお詫びに、後でジュース奢らせて下さい」

こそっと悟君が声をかけてきて。

「お詫びって別にいらな…」

「イチゴオレ。好きでしたよね？」

「好き」

「じゃ、イチゴオレで」

「うん」

イチゴオレの美味しさにあっさり完敗。

玲奈から冷ややかな眼差しを向けられてたけど……だってさ。イチゴオレ。美味しいんだよ？？

共同戦線を張れ　（3）

話し合いは概ね順調だったはず。と秋空は心の中で頷いておく。
例え話し合いの最中に見えない火花が散っていようとも、その話し合いは驚くほど短時間で終わったのだ。単に顔合わせがメインだったからかもしれないが。
とりあえず自己紹介。その後は互いの文化祭のコンセプトを発表。相変わらず金城はお祭りで、聖城は展示会。その装いをどうやって歩み寄らせるのか。それは今後の大きな課題の一つだろう。
正直、この辺りで既にリタイアしたいのは、歩み寄る気配の気の字も今の所見当たらないからだろうか。寧ろ、何でか確執だらけになった両校の歩み寄りを、生徒に一任するなと声を大にして叫びたいのは秋空だけではないはずだ。
「（そうだ。きっと面倒だって思ってるのは私だけじゃないはず！だって小説読む時間が減っちゃうじゃないか！！）」
ぐっと握り拳を密かに。あくまでも密かにつくって訴えてみる。勿論心の中だけで。どちらかというと面倒というよりも、それに時間が取られて小説を読む時間が減るのが嫌だという、ただそれだけの理由だったりもする。
そういう理由じゃなければ、人間観察としてはそれなりに興味深い現場でもあるのだが、音哉がいるとなるとその観察現場としての興味は一気に薄れ、それ所かハイさよならーと現場を立ち去りたい衝動に駆られてしまう。
思考はぐっちゃりぐっちゃりと、秋空らしくなくウダウダと考え込んでいるのだが、後々これも良い経験になるのかなぁ、なんて呟く辺り、秋空のかなり良い性格が伺える。

「とりあえず…とりあえずやるべき事は夕食作りだね」
ゴマをするわけじゃないが、今日は気分的に豪勢にいきたいのだ。疲れ果てた時に美味しいご飯。そしてデザート。ちょっとした贅沢は、気分が浮上するには十分だと手作りじゃない。既に作られた既存のデザートを幾つか買い物籠へと放り込む。
普段は手を出さない高めの嗜好品。スーパーの籠に入れられた８８円のゼリーではなく、棚に一つ一つ並べられた見るからに高めのゼリー。他にはそのスーパーで作られた安めのヨーグルトじゃなく、一段高い場所に置かれたヨーグルトに手を伸ばす。
他にはプリン。勿論、これも三個パックじゃなく、単品のものを手に取り籠へと入れた。秋空の趣味でゼリーやプリンやヨーグルトが多数籠に入ったが、ケーキ類も買っておいた方が無難かもと、ロールケーキとショートケーキを買い込む。その際賞味期限は確認済み。
これの他に夕食のメインとなる材料を買い込み、少し重たくなった籠をレジへと持っていく。作り終えるのは七時ぐらいかなぁ、なんて呟きながら、明るい空を見上げながら自宅への帰路へとついた。
ガサゴソと部屋に戻る事無く、エコバックから買ったものを取り出し、それを手際よく冷蔵庫へと入れていく。今日使う食材はそのまま机の上へと置き、まな板と包丁。その他必要なものを並べていく。
玄関に音哉の靴はなかった。
まだ、学校に残って何かをしているのだろう。
あの話し合いを見れば、今頃どうやって金城に対抗するか――なんて話し合いがされているのは当然といえるかもしれないが、文化祭で金城と対抗出来ると思うのは些か、金城を甘く見すぎていないだろうかというのが秋空の正直な感想だ。
聖城が伝統を育んできたように、金城も金城なりの伝統を育ててきた。文化祭も、皆で一丸となって。寧ろ趣味に走りまくった事も、商売に走り過ぎた事も否定は出来ないが。それでも長年育んできた

金城の集客力。
それは今まで積み重ねられた力ともいえる事。
金城だけで自由に出来るなら、去年までとは殆ど変わらない。聖城と協力って何をするんだろう。正直まったく予想はつかないが、両校で実行委員に選ばれた面々を見れば、それなりに上手く出来そうな気がするというのもある。

「張り合ってくれなきゃ聖城じゃないしねぇ」
金城に対抗しない聖城というのは、今更想像がつかないというのもある。
トントンとリズム良く包丁を動かしながら、秋空はポツリ、とそんな言葉を漏らした。
「張り合う――か。確かにその通りだけど」
「あれ？　まさかの返答。おかえり、音哉さん」
手を止め、入り口の方を見れば突っ立っている音哉。帰ってきたら自室に直行なのに珍しい。そんな感情を滲ませ、秋空は驚いたように目を少しだけ大きく開く。
「まさが、秋空さんが実行委員とは思わなかったな」
「それはこちらの言葉でもあるけれど？」
音哉に背を向け、手を止めていた包丁を再び動かし始める。例え一月以上もの間姉弟をやり、一週間以上もの間二人っきりで過ごしていようとも、未だに他人行儀な二人。
きっかけがどうであれ、こうして言葉を交わすようになったのは、歩み寄ってる証拠だろうか。いや、難しい所だな。と、瞬時に結論を出す。
不自然なほどの沈黙の中に響く、料理をする音。
いつもだったら、という言葉を付け加えるなら、音哉は無言のままこの場を立ち去るだけ。そして秋空も追いかけたりはせず、料理を完成させて一人黙々と食べるだけ。だが、今回だけはどうやら違うらしいと、いつまで経っても立ち去らない音哉の気配で、秋空は

包丁を使う作業を終わらせ、切った食材を炒めてから鍋へと放り込む。ホールトマトとローリエをぶち込んで、この後は煮込めば完成するだろう。
後は冷凍しておいたハンバーグや野菜を焼いたりして盛り付ければいいだけ。
炊飯器でご飯が炊き上がる前に焼きだして、蒸し時間も考えながら逆算する。そうすると、立ち去らない音哉と話す時間は十分にあるかなと、秋空はエプロンをつけたまま手早くコーヒーと紅茶を淹れ椅子へと腰掛けた。
話しがあるなら話そうかとばかりに、テーブルの上に置かれた音哉のマグカップ。口を噤んだまま、音哉は自分の定位置である意思へと軽く腰掛けると、まっすぐに秋空を見つめた。
こうして視線を交わすのは初めてじゃなかろうか。
互いにそんな事を思っているとは思わず、真正面から視線を合わせ、互いに眉間に皺を寄せた。

「……」
「……話しがあるんじゃないの？」
沈黙を破ったというか、沈黙に耐えられなかったというか。秋空が観念したように口を開けば、無表情だった音哉が笑みを浮かべた。
「秋空さんから口を開いてくれて助かったよ」
「ソウデスカ？」
「うん。まさか実行委員とは思わなかったし、隣にいる友人も意外だったからさ」
「意外？」
玲奈が？と言えば、迷わず頷かれる。
「彼女、金城に入るタイプには見えなかったし」
「あぁ。そうなんだ」
声のトーンを落とし、秋空は目を細めた。この手の会話は正直な所、好きじゃないのだ。玲奈の事を良く知らないであろう音哉に言

われるのも、不快だったのかもしれない。
「他意はないよ。単に、文化祭は成功させたいなって思ってさ」
秋空の心境の変化を悟ってか、音哉はあっさりとそんな事を言うと、鞄から一枚の用紙を取り出した。
頬を膨らませながらも、机の上に置かれた用紙の文字を視線で追ってみれば予想外の文字の羅列が続く。
「…これって…」
「見たまま。聖城の意見はまとめてきたよ。模試の上位常連者に対して、偏差値の事で何かを言うのはこっちが馬鹿っぽいしさ」
「音哉さんって二年だよね？　三年が纏めるんじゃないの？」
紙に箇条書きされた文化祭における約束事。
そして、その下には手書きの名前と、拇印が押されている。金城が帰った後に話し合ったとしても、音哉が家に帰ってくる時間を考えれば、時間は然程長くはない。
驚いたように目を見開く秋空に、音哉は不適な笑みを形作ると。
「当たり前だろ。俺が聖城実行委員長なんだから」
と、さも当然とばかりに。
「……へぇ」

ひょっとして。
ひょっとして？
音哉さんってば結構な性格なのかも。

けれど、それを問いかける自信はまったくない。
「（…成績上位者を持ってきたのが功を奏したっていうか。ま～…わかりやすいもんね）」
玲奈や譲に始まり、三年も一年も実行委員のメンバーは、それなりに偏差値が高い。その偏差値はどうやら玲奈の予想通り、聖城にとってみたら大きな武器になったらしい。
「言いたい事はこれだけだから」

テーブルの上に置いた紙を秋空へと押し付け、音哉は鞄を持つと同時に椅子から立ち上がり、さっさと自室へと戻ってしまう。
「…う～むぅぅ。これってつまり、金城の実行委員に言っとけって事かなぁ」
態々会話を持つぐらいだから、きっとそうかな。
そう結論づけると、メールを送る為に携帯を片手に持つと、空いた方の手でプリントを持ち上げる。

金城と協力します。
金城側のサポートとして、聖城の文化祭を行います。
この期間は今までの事は置いといて、真面目に金城に接すること。

ずらり、と並んだ言葉だが、これを聖城学園実行委員長の音哉が中心になって考えたものだとしたら、思わず秋空の口から笑いが零れた。
少しは歩み寄れてるのかな。と、ほんの少しだけ期待しながら、秋空は頼まれたであろう事を実行する。
今日の夕飯は、音哉を誘って一緒にご飯を食べてみようか。
そんな決意をしながら、秋空は送信ボタンを親指で押して任務――自分的に――を果たしたのだった。

共同戦線を張れ　（4）

怒涛の日々でした。まる。

「現在進行だけどね。これは辞世の句でも書くべき？　書くべきだよね？　ねぇ、玲奈」

思わず感情のままに言葉を吐き出せば、名を呼ばれた玲奈は瞳を細め、チラリと一瞥しただけですぐさま視線を逸らした。

そんな玲奈が視線を落とす先には分厚い書類。今度の文化祭に関わる資料一式。

小分けされた紙の束。全て合わせれば広辞苑も真っ青の厚さになるだろう。

「うえー…資材。許可。日程。貸し出し。台本。プログラム。両校を行き来するに辺りの警備員。分厚いねぇ」

「私はこれを読んで覚えているんだけど？　辞世の句を読みたいなら読ませてあげましょうか？」

「いえいえ。謹んでご辞退申し上げますことよ？」

「あら残念」

心底と言ったばかりに細めた瞳で弧を描き、口の両端を上げて笑みを形作る玲奈に、秋空は迷わずに背を向けた。

自分で投下した爆弾もどきだが、これは関わってはいけないという自己防衛本能が働き、自分に与えられた資料を手に取り視線を落とす。隣から聞こえる溜息に、ぞわり、と背筋が嫌な感じで粟立つが、あえてそれも見ない振りを決め込む。

「……」

ここで何かを言おうものならば、それにつけ込まれとってもよろしくない事が起こりそうな予感に、無言のままぺらぺらと資料を捲りながら付箋でチェックしていく。

「（ふむふむ。ここの業者さんと…警備員さんを雇って、両校を行き来しやすくするわけね。あ、もう申請済みなんだ。裏道使用っていっても道路だもんね。許可は取らなきゃだよなぁ。って結構大掛かり）」

一校だけじゃ出来ない企画や、それに伴い大掛かりな仕掛け。頭の良さを活かしての脚本。トリックを見破れた上位１０組に渡される豪華な商品。

そのトリックが中々見破られない事が前提なのだが、例え見破られても宣伝効果を得られればいいといった所だろう。

金城の難攻不落なトリックをつくろう部と、ミステリーは任せとけ部に協力を要請しつつ、これについては聖城のミステリー好きにも手伝ってもらった。脚本についてはミステリー部（略）と総合小説部を中心に作成。金城と聖城からは有志クラスを募り、当日はそのクラスに一任される。

当日といっても、今の段階で話し合いには参加。一般的な感性から意見を言ってもらい、重宝してるらしい。

両校で盛り上げるといっても、金城は兎も角聖城の人間がここまでぶちまけていいのだろうか。なんて心配を秋空がしてしまう程、聖城の学生が金城についてこれてしまっている。

分野がミステリーというのがいいのか。

それとも感化されたのか。

「（面白いならいいけど。どうせなら色々と写真も撮りたいなー）」

学校が変われば雰囲気も変わる。

ここでバシャンバシャンと撮っておいても損はない。いや、堂々と撮れるチャンスを逃すべきじゃないと、心の奥にそっと決意を秘めておく。

ちなみに、秋空のクラスはお菓子処。喫茶店ではない。あくまで、販売員を置くだけの持ち帰りお菓子販売店である。

クラスの意見はあっさりと纏まった。当日は色々回りたいよな、をコンセプトにした話し合い。前日に行われる劇やその他の催しで

もいいんじゃないかという話しもあったのだが、小腹がすいた時の持ち帰りお菓子ってよくない？なんていう一人の意見から、一気にそちらに流れた。

四時間目という時間帯が決め手だったのかもしれない。

ペラペラとページを捲り、最後まで目を通した後、秋空はそれなりの厚さを主張するそれを机の上へと置いた。

玲奈の方を見てみれば、広辞苑真っ青の書類は既に最後の方に差し掛かっている。速読は身に着けているが、捲る腕は疲れないのだろうかというふとした疑問もわくが、口に出すことはしなかった。

細身の美人に見えて、玲奈の筋力は洒落にならない。

アイアンクローの餌食になった人間を間近で見た事があるが、その悶絶した表情は忘れられそうにない悪夢だ。

「何かしら？」

「いえいえいえいえいえ。なんでもございません」

チラリチラリと横目で確認していただけだというのに、秋空の方を一瞥もせずに玲奈から発せられた言葉に、秋空は本能で首を振りながら答えていた。

こちらに向かせてはいけない。

妙な沈黙の中、ペラペラと玲奈が書類を捲る音だけが響く。

席を立つ事も考えたが、とりあえずそれは止めて鞄からノートを取り出した。文化祭に向けて、書き物部として色々と書かなければいけないのだ。会誌に一つ。後はグループ毎にジャンルを決めて、そこで一つ。最低ノルマは二つだが、秋空としてはこの機会に個人誌を発行したいと思っていた。

余裕があれば二次創作にも着手したいが、この分でいくと難しいかもしれない。ストックがないわけではないが、その辺りは某イベントで発行したいのが本音だったりもする。

止まる事なくペンを走らせ、原稿の下書きを完成させていく。

実行委員として燃え尽きるなら、最低限のノルマだけをやってお

いた方が無難だとは思うが、時間が足りなくなればなる程色々なものに手を出したくなってくるのは何故だろう。
そこまで器用な人間じゃないとは分かっているが、つい横道に逸れたくなるのも心情だったりする。
玲奈もソレは分かっているのか、この件については何も言わない。ただ時折り、ジッと見られながら栄養剤を差し出される時があるのだが、それは素直に気遣いだと思って受け取っておく。
おそらく、実行委員に付き合わせたお詫び――というよりも、最後までついてこれるわよね？という脅しのような気がしないでもないが。
「アキ」
「ん？」
読み終わるのも時間の問題だとは思っていたが、やはり予想よりも早くに読み終えた玲奈が、文化祭の資料とは別のそれなりの厚さの紙の束を秋空に押し付ける。表紙には何も書かれていないが、指先が触れた瞬間ぞわわ、と背筋を嫌な感触が走り抜けた。
動物的本能が発揮されたのか、それとも玲奈が素晴らしい程の笑顔を浮かべていたからか。
「これ…」
「見てみればわかるわよ」
「そうですよねー」
紙の束を押し付けられた時点で見ろ、ということなのだ。
しぶしぶといった雰囲気を隠す事もせず、秋空は紙を一枚めくり、その瞬間凍りついたように固まった。
「……玲奈さん？　これって…」
戸惑いを露わにしながら玲奈を見てみれば…。
「義弟君のファンクラブがあるみたいよ？」
「……へぇ」
「聖城に入る前からでね。その子たちの一部が金城に入って、細々とだけど続けてるみたいね」

「……ほぉ」
「流石にプライベート過ぎる事は調べていないから、一線は越えてないみたいよ？」
「越えてたら怖いわ」
そんなストーカーさんがいたら、今の秋空の自宅の状況は決して良くは思われないだろう。
背筋を走り抜けた嫌な予感はこれか、とも思ったが、玲奈はそんな秋空の様子を承知の上で言葉を続けた。
「中学時代はあったみたいよ。でも…ね。高校入学と同時にかしら？　義弟君が駆逐したみたいね。そうそう。ファンクラブ情報によると、その一ヶ月前の雨の日に、走り去る少女に熱い眼差しを向けている義弟君の姿が目撃されたみたい」
「どこからその情報を得たのかがものすっごく不思議だけど…大丈夫！　あえて突っ込まないよ。怖いから！」
寧ろそんな話しは別に聞きたくないと思うのだが、玲奈が止める気はないらしい。
「義弟君は女嫌いで有名みたいね。初恋は雨の日の君かしら？」
「というか、十分その雨の日なんとかは個人情報じゃないの？」
「偶然らしいわよ」
「……そかそか」
執念を感じさせる偶然に、秋空は沈黙する事を選んだ。ぺらぺらと資料を捲れば、音哉の日常を感じさせる写真が山ほどとある。
聖城は共学だが、見事に写っているのは男だけ。
「学校でもデレがないんだ」
眉間に皺はデフォルメかと、この時ばかりは心底実感したりもするのだが、次の瞬間秋空はその資料を玲奈の目の前へと置く。
「ちょっと見ちゃったけど……これ以上はいいや。女嫌いでも何でも、家だと今更？　なんていっていいかわからないんだけどね。心配してくれてありがとね」
とりあえず、文化祭は成功させよ。

と笑う秋空に、玲奈もそうね、と微笑を浮かべた。

秋空はペラペラと捲っただけで、その資料は読まなかった。
精々写真が目に入った程度の事。それも日常に流されるように、記憶に残らない些細なもの。
けれど、見なくて正解ね。
そう、玲奈な内心呟く。

秋空は覚えていないが、高校入学前に傘を一本、見知らぬ誰かにあげた事があるのだ。
次の日、お気に入りの傘を持っていない事を疑問に思った玲奈が聞いたのだが、返ってきた言葉は知らない子にあげた。という単純なもの。
折りたたみ傘は持っておくべきだよねー。なんて軽く笑っていたが。

「（あらあら。ホント、秋空ってば無防備ね）」

そんな事を玲奈が考えているとはまったく思っていない秋空は、改めて文化祭に向けて気合をいれたのだった。

文化祭　（1）

慌ただしい。寧ろ慌ただしすぎる日々が終われば、文化祭本番はあっという間だった。忙しすぎる日々は時間が経つのが異様な程早いが、今回はまさしくそれだと秋空は思っていた。

忙しくて、家に帰れば原稿を打ち込みつつ、寝落ちする直前にベットへと倒れこむように睡眠をとる。一日が４８時間あればいいのに！と叫べば叫ぶほど、時間が足りなくなるような気がするのは何故だろうと疑問に思いながら、原稿が完成したのはある意味奇跡かもしれない。

実行委員が急がしくて、部長に原稿のデータを送るだけで精一杯。出来れば部活の方の売り子もしたいのだが、残念な事に今の時間は見回り中。それを終わらせるまで部活に顔を出すのは難しそうだ。

だが、今回の当番は城崎とのペアで、気分的には随分と楽だったりもする。

ぽてぽてと、少し間の抜けた靴音を響かせながら、キョロキョロと辺りを見回しながら歩いていく。辺りを忙しなく見回す秋空とは対照的に、城崎は淡い笑みを浮かべながら視線を前に向けていた。

ただでさえ人気の高い金城の文化祭。今年の文化祭は合同だという事も手伝い、金城意外にも聖城の生徒の姿も、一般のお客の姿も入り乱れるように目前に広がる。

油断をすると、城崎ともはぐれるんじゃないだろうかという盛況ぶり。

そんな中でも、人々の視線を集める城崎は流石だと、心の中で拍手喝采をひっそりと送ってしまう。

空気に溶け込むような地味な秋空の存在は眼中に入らないのか、割と足止めをくらう城崎とは対照的にスムーズに見回りが出来る秋空。しっかりと見回りという役目を果たし、人通りが少なくなった頃に途中で買ったお茶のペットボトルを疲れ果てている城崎へと渡した。

前を向いていた理由は、視線を左右に動かすと勘違いする人がいるから、らしい。

「あらら。大変で」

疲れた城崎が漏らした言葉に、一応気の毒そうな眼差しを向ける秋空。

「すごく他人事？」

「うん」

「……鈴乃音は…なんていうか素直だよね」

「正直に生きてるから。割と」

「見てて分かるよ。二次元限定で趣味が合うし」

「大丈夫。否定はしてないから」

「知ってる。というか、金城で引かれた事ないし」

「そだね」

二人が揃うと、大体がこんな感じでのんびりとした時間が流れていく。好きな漫画やゲームの話しをしたり、人物観察でどんな人を見たか等など。話すネタは尽きなかったりもするのだが、やはり文化祭。

いつものように趣味の話しに勤しんでいたが、時間が経てば別の女性たちが城崎を見つけ、再び女性たちの包囲網が完成されようとしていた。

そんな中、ここぞとばかりに城崎とお近づきになろうとする女性に弾かれ、秋空は窓の手すりに掴まるようにして、なんとか体勢を整えた。

「……（恐るべし。女性の執念）」

隙間から手を伸ばし、後をよろしくとばかりに手を振る城崎に頷きながら、目立たないように戦線離脱を試みる。ここで顔を覚えられ、後々絡まれる要因だけは作りたくない。
城崎にはほんのちょっぴり申し訳ないと思いながら、見捨てさせてもらうことにした。
本部に報告をすれば、漸く書き物部に顔を出せる。
ちなみにクラスの方は実行委員の見回りがあるという事で、当番から外させてもらった。下準備は全力で手伝ったりもしたが、それは部の方に顔を出した後にでも確認しに行こうと思いながら歩いていく。
実行委員の本部は、放送室にある。
本部待機も当番制で、今の時間は玲奈と相田の二人組み。この場合一人端数が出るのだが、その助っ人として放送部部長が力を貸してくれる事になった。
「あ…」
放送部のドアに手を伸ばした瞬間、秋空は思わず声をあげていた。
右手の平に見せるのは、ちょっとした切り傷。痛みがないから気付かなかったが、窓のサッシでやったらしい。弾き飛ばされた勢いが相当だったのかどうなのか。
「これなら絆創膏だけで十分かな」
血は止まっている。けれど切ってる部分だけは気になるかなと、ドアを開ける前に制服に入っていた絆創膏を取り出し、それを手の平にぺたりとつけた。
クラスのお菓子作りが今日じゃなくて良かったとしみじみ思いながら、放送部のドアをノックする。
「玲奈ー。悟君ー」
「どうぞ」
声をかけたら、中から玲奈の声が返ってきた。その声は退屈そうで、秋空は内心肩を竦めながら遠慮なく開けた。
目に飛び込んだ光景は、机の上に置かれたお菓子の山とポット。

淹れられたばかりであろう紅茶とコーヒー。カップは三つ。
「アキはカフェオレだったわね。どうぞ」
玲奈が差し出したものは、アイスカフェオレ。放送室で座っている二人はホット。見回りを終えたばかりの秋空にはアイス。
「ありがとー。お茶は買ったんだけどさ。甘いのも飲みたかったんだ」
秋空の席を一つ開けてくれている二人の間に入るように、礼を言いながら腰を下ろす。この人通りの中、校舎を端から端まで集中しながら見回ったのだ。その疲労は相当のものだったらしい。
氷の入ったカフェオレがものすごく美味しく、一気に飲み干してから秋空はホッとしたように椅子にもたれ掛かった。
肩ががちがちで、ここ数週間の疲れを収束したような固さ。今日はお風呂でゆっくりと身体を解そうと思いながら、秋空は二人の視線が集中している事に気付いた。
「ん？」
「アキ」
「先輩」
もう一杯カフェオレを淹れてくれようとしていたであろう玲奈の手は止まり、クーラーボックスからイチゴオレを取り出し、秋空の前へと置こうとしていたであろう相田の手も不自然に止まっている。
これを全部飲んだらお腹がたぽたぽになりそうだが、飲みきれるから問題なし。なんて秋空は思っていたのだが、動きを止めた二人の視線は、腕を伸ばした秋空の手の平へと注がれていた。
それに、いつもとは違った感じの呼ばれ方。
「あー。これ？　少し切っちゃったみたい。もう止まってるけどね。玲奈。カフェオレ淹れてくれるの？？」
「えぇ。珍しいわね。運動神経は悪くないのに転んだの？」
「そうですよ。アキ先輩、見た目とは反比例して運動神経は良いじゃないですか」
「そりゃこの分厚い眼鏡はほとんど伊達だし。じゃなくて、転んで

ないけど。転びそうになっただけ。窓のサッシで切ったみたいだね」
二人も気をつけてねー。
そう言葉を続ける秋空に、玲奈はカフェオレをグラスに注ぎながら視線を相田へと移す。玲奈の視線に答えるように、相田が一回頷くと、棚に置かれていた救急箱から治療道具一式を取り出し、それを玲奈へと手渡した。
「大げさな」
思わず口から出た言葉だが、その瞬間ものすごい強い眼光を浴びせられ、秋空は頬を引き攣らせながらおとなしく手を差し出す。
「どうせ、城崎君のファンの子に弾き飛ばされたんでしょ。だから、相田に任せとけば良かったのに」
「俺と城崎先輩だと、囲まれちゃって見回りにならないから――っていう理由でしたけど、俺もそう思いますね」
「大丈夫大丈夫。見回りはあれで終わりだし。包帯まで巻くの？」
されるがままにしていたら、何故か包帯まで巻かれ始める。このままだと相当大げさになりそうだと思うが、玲奈と相田が怖くて、やはりされるがままにしておく。
「結構深いわよ。相変わらず血が止まるのは早いわね」
「んー。そう？　そんなに深いとは思わなかったんだけど」
「こうしておけば、アキに用事を頼もうとする人間は激減するでしょ。遠慮なく休んでおきなさい」
「え？　目的それ？」
「私が治療したって言うのよ」
「オッケー」
普段はサバサバとしているのに、こういう時は過保護だと苦笑が漏れる。
隣で相田が相槌を打つように頷いているのも面白くて、秋空は礼を言いながら治療を受けたばかりの手に視線を落とす。
秋空が手を動かしやすいように、動きを妨げないように巻かれた包帯。

そして、目の前に置かれるイチゴオレ。
「どうぞ。これで糖分を補充どぞ。でも、書き物部であんまりテンション上げ過ぎないようにして下さいよ？　一時間後に俺が合流するまで、それは取っておいて俺と一緒にはしゃいで下さい」
「はは。その時までいたらね？　クラスにも顔を出したいし。あ、見回りはオッケー。問題なし。人は多いし聖城の生徒も結構いたけど、やっぱり問題なかったし雰囲気も良かったよ」
「わかったわ。アキはこれを飲んで、相田から貰ったソレは後にしなさい。パックだから問題ないでしょ。どうせ部活に顔を出せば喋って喉も渇くだろうし」
「…いつ飲んでもいいんすけどねー。比良先輩に言われると微妙って言うか」
「相変わらずテンポがいいねー。ごちそうさま。じゃ、行ってきます。二人も気をつけて無理しないようにねー」
二杯目のカフェオレを一気に飲み干し、秋空は二人の頭を数回撫でた後に席を立つ。秋空の言葉に不満そうな玲奈と相田だったが、特に反論の言葉を言う事はなく、手を振る秋空を見送った。
パタン、と閉められる扉。
途端に静まり返る室内。

「……相田」
「……なんです？」
「アキに手を出さないように」
「ソレは、比良先輩に言われる事じゃないですけど？」
「「……」」

秋空は未だに気付いてはいないが、玲奈と相田の二人の性格は非常に似通っている。似ているが故にこうして言葉の応酬を水面下で。もしくは視線だけで行ったりもするのだが、秋空に関してだけは気が合うのは今更だろう。

その二人のいつもの冷戦には気付かず、人の合間をぬう様に部室へと向かう秋空。左手に巻かれた包帯はパッと見痛々しいが、本人だけが気にせず腕を振りながら歩いていく。

そんな秋空の後姿をタイミング良くなのか。それとも悪くなのか。判断に迷う所だが、偶々見てしまった音哉は左手の白に目を奪われ、手に持っていたパンフレットを落としたのも気付かずにその場に立ち尽くしていた。

文化祭　（2）（前書き）

※展開が早いです。

文化祭　（2）

何でこんな事になったんだろうかと、頭を抱えずにはいられない。
わざとらしくポンッという音をたて、右拳を左手の平の上へと置いてみる。けれど事態が好転するわけもなく、秋空は壁際に追い込まれたまま迫り来る壁。もとい女性陣に怯えきっていた。

事の起こりは３０分前。書き物部に顔を出した後、クラスの様子を見に行こうとガラリ、と引き戸を開けた瞬間、慄いた。
それはもう馬鹿正直に隠す事無く、一歩後ろに下がるというおまけ付きで頬を引き攣らせたまま人の塊を確認していく。
大半が女子。男子は荷物持ちよろしくとばかりに背後に控えさせられている。顔を見てみれば、金城と聖城で半々と言った所だろう。実行委員としてはこうして当たり前のように一緒にいてくれる場面を見ると、苦労が報われたかなぁ、なんて嬉しくなったりもするのだが、今だけは嬉しくない。
嫌な予感、というかこれは脅威だろう。
「な…に？」
珍しく秋空の声がどもる。
それでも、この団体を目の前に突破をする為には、状況把握をしておきたいと自身を奮い立たせた。
本音を言えば…。
「（すっごーい逃げたい。ホント逃げたい。普段は可愛いけど、これだけ集団になると怖いしかない）」
だったりもする。
「鈴乃音さん」

「何？」
戦々恐々とする秋空とは対照的に、口を開いた女子は興奮気味にも見える。だが、この表情は何処かで見た事があると気付いた瞬間、最近度々感じた警報が脳裏に鳴り響いた。
これは、非常にまずい。
自分の好きなジャンルなら、ひゃっほー、と間抜けな声を上げながら先頭をきっていくのだが、如何せんそれ以外は消極的だ。
面倒だから当事者にはなりたくない。でも見学はさせてねとばかりに人の会話や行動を見ていたりもする。
そう。当事者は嫌だ。
それなのに、どうして目の前の団体は、お祭り中のテンションマックス的な表情を浮かべているんだろう。わかりたくないが、嫌でも男子が持っているレースをふんだんに使った可愛らしいドレスに目がいくんだろうか。
「……」
チラリチラリと気付かれないように隙間を探す。
探すけど、人間どころか猫の子一匹通れないっていうのはきっと、こういう事を言うのだろうとこの時ばかりは実体験で実感した。
「鈴乃音さーん。覚悟してね？」
「嫌だなぁ。すっごく遠慮したいな」
「無理よ。だって鈴乃音さん。選ばれたもの」
「何に？」
実行委員の秋空の管轄外で、何かが行われていたらしい。
きっと、というより絶対、玲奈も知らないだろう。こういう時の強制力はお祭りならではだが、秋空としては未だに逃げる機会をうかがっていたりもした。
「装いをかえたらきっと雰囲気が変わるよね女性部門ベスト１０に選ばれたのよ！」
「わんぶれーす」
鬼気迫る様子に、思わず間抜けな言葉を漏らしてしまう。確か運

動部だっけか。と同じ金城の女の子を見ながら、肺活量は流石だなぁ、と現実逃避とばかりにそんな所に焦点をあてながら感心した。
「さぁ、いくわよ。鈴乃音さん」
「えーー」
同じ女子とはいえ、秋空よりも筋力がついた女子は凄まじい。
抱き上げられ、変わる視界を堪能しながら、秋空は遠い目をしながら部活の仲間に手を振っていた。
勿論、生き延びれよーとばかりに手を振られたりもしたのだが。

そして、空き教室に連れ込まれ壁際に追い込まれる。
ここまできたら覚悟をするべきだろうかと、半ば自棄になりながら秋空は両手を挙げた。降参ですとばかりに。
壁際に追い詰められたままこの攻防戦を続けて実力行使に出られた方が、はっきり言って怖い。トラウマになってしまいそうだ。
諦めた方がきっと楽だと、瞳を輝かせる女子たちにひん剥かれるのだけは阻止しながら、淡いピンクのドレスを着込み、髪をいじられ、化粧を施され、鏡に映った自分を恐る恐る見てみれば……。
「おー」
髪はふんわりお姫様ヘアー。
ほんのりと施された薄化粧。取られた眼鏡。伊達だが、いつもあるモノがないと落ち着かない。踵のない靴なのはせめてもの救いなのだろうか。

「やっぱ可愛い」
「さすがベスト１０」
「おおー」
三者三様の声があがるが、秋空は気づかない振りをしたまま机の上に置かれてあった紙に視線を向けてみた。
確かに、鈴乃音秋空という名前がある。
誰だこんな余計な企画をたてたのはと、内心苛っときた感情を押

し込め、視線を更に下へと移す。
「あぁ。ありがちなスタンプラリーね。動き回るスタンプ要因に選ばれちゃったのか」
どうやら、聖城と金城を自由に行き来しても良いらしい。まさか公共の道路でこんな格好をお披露目したくはない。移動という手段は即座に却下しながら、秋空は続けた。
「すぐに押しちゃっていいの？」
参加賞のノリの記念品か、それとも商品か。それによって変わると思って聞いてみれば、返ってきたのはにんまりとした笑み。
思わず後ろに下がりながら返答を待っていると、さも当然とばかりに首を横へと振られた。
「逃げて逃げて逃げまくっちゃって。スタンプラリーは二種類あって、鈴乃音さんがやる方は、成功者がいなければいないほうが嬉しい企画だから」
「へー、そうなんだ」
そんな企画を作るなというのも、今更なのだろう。
「はい、スタンプ」
そして反論不可とばかりに手の平に押し付けられたハート型のスタンプ。
「さぁ、鈴乃音さん！　行っちゃって！！」
「……はーーい」
反論は無理そうだと、何度目かになるか分からない腹を括りながら、秋空は女生徒が怖い魔窟から足を一歩外へと踏み出した。

「白雪ちゃん。スタンプ押してもらってもいい？」
なんてお約束な。

いかにも軽そうな他校生に呼び止められ、秋空は自分のとりあえずの名前が白雪だという事を確認しながら、にこりと愛想よく笑う。
「可愛いねー。これが終わったらさぁ…俺たちと…」
「捕まえられたらスタンプねー。さらばーー」
男が最後まで言い切るより先に、隙をついて走り出す。
踵のない靴は善意でもなんでもなく、これの為。余程スタンプを押したくないらしい企画発案組み。
人の隙間を縫う様に。寧ろ廊下を歩いている人たちを壁にしながら、一目散に逃げ去る。これで白雪を見たという目的情報が多数のぼるだろうが、ここは金城。秋空の慣れ親しんだ学校である。
逃げ場所なんてどうとでもなるとばかりに、ひたすら走って追いかけてくる人間を撒く事に集中していたのだが、何でか追っている人間の数が増えているような気がしないでもない。いや、してる。始めは二人だけだったはずだと横目で確認すれば、１０人は越えるであろう男の集団が秋空を追いかけていた。
「（今度は男かっ。嬉しくないっっ）」
こんなふうに目がぎらついた男に追いかけられたくない。
女の子はまだ許容範囲内だが、追いかけてくるのは掴まったら身の危険がありそうな男性の集団。一心不乱で隠れられる場所に逃げ込もうと身体を動かす。
でも、撒かなきゃいけない。この人数を前に逃げ切れるかなと不安が脳裏を過ぎった瞬間、後ろの方で声が上がる。
けれど確認している時間はない。
秋空は疲れた身体に鞭をうつように、廊下を蹴り上げようとした瞬間横から伸びてきた腕に身体を絡め取られ、本当の空き室へと連れ込まれた。
ぐえっと腹にかかる衝撃。
文句を言おうと口を開こうとすると、そこには指が当てられる。どうやら喋るなという事らしい。大人しくその通りにしていると、外をバタバタと走り去る音が聞こえた。

「（…助けて……くれたのかな？　文句を言わなくて良かった）」
文句を言おうとしたら、目の前の人間に止められたのだが、無理に口を開かなくて良かったと心底思う。
改めて礼を言おうと、顔をあげてみれば。

「……なんてべたな展開…」
そこには音哉の姿。
どことなく疲れ果てているようにも見えるが、それ以上に助けてくれるとは思っていなかった人物だけに、秋空は驚いたように目を瞬く。
「…手。怪我してたみたいだし。流石にあれは怖いだろ？　だから、その、余計なお節介かもしれないけど、俺の姉、でもあるわけだし」
聞いてもいないのに、つらつらと忙しなく言葉を吐き出し始めた音哉に、秋空は更に目を見開く。
「今更って思うかもしれないけどっつーか俺も今更だと思うけど。今回の件で見直したっていうか。なんていうか。いつまでも反発してる俺が子供（ガキ）っぽいっつーか」
「……」
「男に免疫なさそうだし。あれは怖いだろうし。手は怪我してるし」
「（怪我ネタ二回目……なんていうか、いっぱいいっぱい？）」
澄ました表情の音哉しか知らなかった。
まさか、こんな風に助けてくれるとは思わなかった。
驚きで見開いた目を弧に描き、秋空は笑みを漏らした。
「助けてくれて、ありがとね」
初めて会った時から数ヶ月。
秋空と音哉の視線が、初めて絡まった。
「――ッ。いや、別に家族だろ。礼を言われる事じゃない」
照れたようにそっぽを向く音哉に、秋空は止まる事無く笑い声が漏れる。ここ一週間、音哉と秋空は一切顔を合わせなかった。文化祭の準備で忙しかったというのが理由。

お互いが一切それを気にしていなかったのだが、少し間を空けてみれば何でか姉弟の関係が成り立っていた。
「手はね、玲奈がやってくれたの。ちょっと切っちゃって。血は止まってたんだけど、一応ね」
だから酷い怪我じゃないよ、と笑えば、音哉が安堵したように眉尻を下げた。つり目がちの音哉にしては珍しい表情。秋空は初めて見たが、嫌な気分所か寧ろ嬉しいとさえ思った。
そんな秋空の心境を知ってか知らずか、音哉は何処か照れたような表情を浮かべ、視線を秋空の後ろの方を見ていた。今までが今までだけに、やはりこうして真正面から対面するのはお互い照れるらしい。
「そっか。良かったよ」
秋空の手を取り、包帯の上から優しく触れる音哉の指先。
「（…そっかそっか。音哉さんは、至近距離の人なんだ）」
くすぐったい感触に目を細めながら、改めて音哉の距離感を再確認。慣れてしまえば、秋空よりも音哉のほうがソレは遥かに近いのかもしれない。
ならばここで照れるよりも新しい家族との接触（コミュニケーション）を楽しもうと、音哉に掴まれている手とは逆の手を伸ばし、ゆっくりと手を動かした。
兄弟がいたら一度やってみたかった事。
頭撫で撫で。
「…秋空？」
「アキでいーよ。一度やってみたかったんだ。こうやって甘やかすの」
どうやらさん付けはやめたらしい。
「――ッッ」
「ね。音哉？」
音哉に倣い、秋空もさん付けを止めてみる。
なんだかとってもいい家族になれそうだ。と、助けてもらった感謝の気持ちが後押ししながら、今までグダグダと考えていた事が全

て吹き飛ぶ。

こうなってくると両親が帰ってくるのが心底楽しみだと、笑みが湧き上がる秋空とは対照的に、熱を持った頬を誤魔化す様に眉間に皺を寄せる音哉。

浮かれた秋空は、そんな音哉の様子にはまったくといっていい程気付かずただ笑うだけだった。

お約束はお隣に・エピローグ

過ぎ去った激戦に疲れ果てた身体。
テンションをあげ過ぎた精神の方が疲れ果てているのかもしれないが、とりあえず文化祭後の休日を楽しむように、暖かな布団に挟まれながら秋空は腕を伸ばした。
今日の朝食は、昨日の帰りに袋一杯に買ってきたパンがある。冷蔵庫を開ければパックのコーンポタージュ。サラダ。それにデザートとしてヨーグルト。
ヨーグルトソースは秋空の趣味で、イチゴ、ブルーベリー、フルーツの三種類が常備で置かれている。
冷凍庫にはタッパーに詰められたおかず類。レンジで温めるご飯は常備。何も問題はないとばかりに、伸ばした腕を膝に巻きつけるように背中を丸め、二度寝に突入した。
普段なら既に活動している時間帯。それなのに二度寝。何て贅沢なんだろうとニンマリとした笑いを隠す事無く漏らすと、秋空は半分程落ちていた瞼を完全に閉じる。

トン、トン。

瞼を閉じるとほぼ同時に、室内に響く音。
誰かがノックをした音。
この家には秋空と音哉の二人だけ。誰かなんていうのは今更で、音哉しかいないのだが珍しいと、秋空は眠たい目を擦りながら布団を頭に被せるようにしながら立ち上がった。
珍しい音哉のノック。珍しい所じゃなく、こうして秋空の部屋を訪れるのは初めての事。流石にそれを無視するのは憚られると思い

ながら、それでもすぐに寝なおせるように布団をズルズルと引きずりながら歩いていく。
「どうしたの??」
カチャ、とノブを回し、秋空は自分よりも高い音哉を見る為に顔を上へと上げた。
「…スープとか、温めたから。後、父さんと母さんが帰ってきてる」
「帰ってきたの？　急だね。パンも多めに買っといて良かったよね」
お腹がすき過ぎて、膨大な量のパンを買ってしまったのだが、どうやら無駄にはならないらしい。
「ありがと。顔を洗ったら行くから」
二度寝に突入しようとしていた瞼はすっかりと重くなっている。仕方無しに右手で擦りながら、箪笥の上に置かれていたタオルへと右手を伸ばす。可愛いウサギがプリントされたタオル。秋空のお気に入りの一品だ。
名残惜しそうに掛け布団をベットの上へと放り投げると、秋空は後ろ髪を引かれる思いで自室に背を向けた。
リズムよく、ではなく、のんびりと、寧ろ途中で止まりながら階段を下りた後、洗面台に向かう前にリビングに顔を出す。一応、帰ってきたならおかえりなさい、は言った方がいいだろう。流石に素通りは出来ないとドアノブに手を伸ばし、欠伸をかみ殺しながら龍哉と恋華の姿を確認した。
「おかえりー。顔洗ってくるねー」
「あらアキちゃん」
「ただいま、アキちゃん」
音哉に膨大な量の土産を押し付けている恋華と、別の土産の山の袋を手に取っている龍哉の姿。
二人が旅行に行ってから一ヶ月。この程度の時間で何かが変わるという事はないらしい。相変わらずの二人の姿と、恋華に猫可愛がりされている音哉に欠伸ではなく笑いをかみ殺しながら、にこりと笑顔を一つ浮かべ、今度こそ洗面台へと向かう。

文化祭の時から楽しみにしていた家族の団欒。
「うん。やっぱりいいね」
しみじみと呟いてしまう。
姉弟になる前の音哉と秋空の関係も捨てがたいが、やはり自宅だとこっちの関係の方がいい。
「お母さんとお父さんに何て言おうかな。それとも、言わずに突っ込んでもらおうかな」
きっと、今の秋空の態度も驚きかもしれない。
リビングに顔を出した秋空は、音哉に対しても笑みを浮かべたのだ。それに、母親である恋華が気付かないはずがないのだ。
だから、今頃リビングでは音哉が二人から詰め寄られているだろう。　その状態で放置を決め込んでもいいのだが、それだと音哉が可哀想かもしれない。仲良くなってから気付いたのだが、音哉は身内の存在に対しては不器用だ。
学校ではあんなに要領良くやっているのに、身内にはそれがまったくと言っていい程発揮されない。

パシャリ、と水音をたてながら手早く顔についた泡を洗い流し、タオルで水分をふき取りながらついでに洗濯機のスイッチを押す。
今日の天気予報は晴れ。洗濯物を干しながらのんびりと話しをするのもいいかもしれない。今から干せば、日が陰る前には乾いているだろう。
旅行から帰ってきたばかりの両親の洗濯物。音哉と秋空の洗濯物。これだけの量だと干し甲斐があるなぁ、なんて呟きながら、鏡に映る人影に首を傾げた。この家の住人は、秋空を除いてリビングにいるはず。
「……あれ？　どうしたの？？」
不思議そうに振り返ってみれば、音哉の姿。
最近ではまったく珍しくないこの構図。文化祭後の短時間ですっ

かり慣れてしまった秋空は、驚いた様子も見せずに首を傾げる。
「母さんの土産攻撃がすごくてさ。アキもこいよ。アキは、父さんからの土産攻撃な」
「生贄ですか」
矛先を逸らす気だろう。
音哉はやる。
平気でやってしまう。
「あぁ。勿論」
そんな秋空の思考を裏切る事無く、音哉はきっぱりと言い切る。
秋空に矛先を逸らして脱出する気だと。
「……ま～、いいんだけどね。お土産嬉しいし」
「変なものは買ってきてないから大丈夫だろ」
「多分ねー…ってその前にご飯食べようよ。温めてくれたんでしょ」
「じゃ、土産攻撃は食後の運動な」
唇の端を上げて笑う音哉。
「らじゃー」
苦笑しながらも、確かに、と頷く秋空。
あの量だと、見るだけで一苦労だろう。
ふふ、と笑いを零しながら音哉の横を通り抜ける秋空。そんな期限の良さそうな横顔を眺め、音哉はちらり、と回っている洗濯機へと視線を向け、口をへの字に曲げるように顔を顰める。
「また、一緒に洗っただろ」
置いといたはずの場所から消えた洗濯物。その後ろには回っている洗濯機。
「そっちの方が効率いーし」
あっさりと言われ、更に口を噤む音哉。
「……服だけなら、別に気にならないんだけどさ」
まったく気にしていない秋空は、音哉のそんな心からの呟きを拾う事無く、早々とリビングへ戻ってしまう。

ぽつり、と一人残された音哉。
「……はぁ…家族って、難しいな」
本音を小さな音にのせ、空気にのせてみるが、拾ってくれる存在は既にこの場にはいない。もう少しここにいれば迎えに来てくれるだろうが、両親のどちらかが来ればからかわれるだけ。
しょうがない。
とりあえず今は目をつぶり、音哉もゆっくりと足を動かし始めた。

秋空の事だからコーヒーをカップに注いでくれているだろう。
ひょっとしたら両親が色々と注文をつけて、紅茶も淹れているかもしれない。
そんな家族の初めての団欒を楽しみに、開いたままの扉から一歩、リビングに足を踏み入れた。
暖かな陽気。
でも、暖かいのはきっと、それだけじゃない。

「音哉。コーヒーと紅茶、どっちがいい？」

「今日は紅茶。甘めで」

やっぱりと思いながら、今日の気分でリクエスト。

「りょーかい」

秋空の返事に満足気に笑みを浮かべ、呆気に取られている龍哉と恋華にも笑みを向けておく。
返ってきたのは二人の嬉しそうな笑み。
こういうのも悪くないと、秋空の淹れてくれた甘めの紅茶を、喉の奥へと味わうように流し込んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4397r/

お約束はお隣に

2011年4月1日01時26分発行